

Catalog 2020-#5

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com



(Catalog 2020-#5 紙版使用表紙ジャケット) JENNY STURGEON/The Living Mountain(Scotland)

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。

プライス・コード{ a ¥ 1 6 9 0 / A ¥ 1 8 9 0 / B ¥ 2 0 9 0 / C ¥ 2 2 5 0 / D ¥ 2 4 9 0 }

(表示価格は税抜き) 別途消費税が加算されます

(送料)

※ご注文枚数に関係なく《一律250円》郵送

ただしLPを含む場合は一律500円。

※代金引換送料(郵送): 初回390円/二回目以降590円何枚でも)

LPを含む場合は+250円。

注文方法サイト: <http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm>

【ご注文はできるだけ11/24までをお願いします】

注文方法1の場合を除き、発送はご注文受取り後約5日以内にした
たいと思っておりますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文
文の場合は、2週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受け
しておりません。

- お問合せはメールにてお願いします。
- ご注文の際、プライス又はプライス・コードをお書き願います。
- カタログは郵便にてお届けします。

(新型コロナウイルス禍の今年最後の「密」通販カタログ)

*前々回と前回、トップ3くらいまでの商品の注文が最近ではな
かったくらいの注文が寄せられていて、不思議な気持ちです。ここ数
年在庫が残らないように、枚数を抑えて仕入れているので、かつて
以上に補充に追われています。そのことで多くの方にご迷惑をお
掛けしています。にもかかわらず、苦情を言われる方は一人いらっ
しゃいません。皆さまの寛大さに感謝します。

*ようやくアイルランドからの日本向け郵便が再開して、色々入荷
し始めました。しかしご存じのようにアイルランドを含め、ヨーロ
ッパで新型コロナウイルスの新規感染者が急増していて、いつまた
停止になるかも知れません。おまけに一昨年卸業廃業後も特別に値
引きして売ってくれていたアイルランドの店(30年以上のお付き合い)
もいよいよ年内で店じまい。これまで通り、状況の変化に対応し
てマイペースで店を運営していくしかないですね。

*今回は SSW(Singer & Songwriter) & ルーツロック系(知る人ぞ知る
スワンプ女王の Dianne Davidson の未発表旧録曲の新譜や Eric
Andersen の未発表旧録曲の新譜そしてオランダの Continental レコ

一ドの三枚の新譜～SSWの Ad Vanderveen の新譜、米国のSSWの Douglas Greer の新譜そして南部ロックバンドの Copperhead County の新譜～は一押し)と トラッド系 (スコットランドの Jenny Sturgeon の新譜と アパラチア の Sally Anne Morgan の新譜は出色) 中心の新入荷商品中心の ミニ(?) 通販カタログ です。

(分割払い)

*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は **12月31日** まででOKです。

*** TOP 30 SELLERS(2020-#4) ***

- 1) FAY HIELD: Wrackline (England)
- 2) WILDERNESS YET: Wilderness Yet (England, Ireland)
- 3) DAN PENN: Living On Mercyn (USA)
- 4) DIRK POWELL: When I Wait For You (USA)
- 5) SHIRLEY COLLINS: Heart's Ease (England)
- 6) LYNN MILES: We'll Look For Stars (Canada)
- 7) MIKE McGOLDRICK・JOHN McCUSKER・JOHN DOYLE
: The Reed That Bends In The Storm (Scotland, Ireland)
- 8) MOLLY TUTTLE: But I'd Rather Be With You (USA)
- 9) MARY CHAPIN CARPENTER: The Dirt And The Stars (USA)
- 10) AGI HERCZKUS & A BANDA: Kamara (Hungary)
- 11) KATE RUSBY: Hand Me Down (England)
- 12) DAOIRI FARRELL: A Lifetime Of Happiness (Ireland)
- 13) BRIAN O HEADHRA & FIONA MACKENZIE: Tuath (Scotland)
- 14) ROBERT JON & THE WRECK
: Last Light On The Highway (USA)
- 15) CHRIS LESLIE: Fiddle Back (England)
- 16) KATHLEEN EDWARDS: Total Freedom (Canada)
- 17) UNTHANKS: Live And Unaccompanied
~Special Film Edition (England)
- 18) EMMA SWIFT: Blonde On The Tracks (Australia)
- 19) RORY BUTLER: Window Shopping (UK)
- 20) JONI MITCHELL: Live In New York (Canada)
- 21) DAVID BLUE: These 23 Days In September + Stories +
Nice Baby & The Angel + Cupid's Arrow (USA)
- 22) DAVE COUSINS: Boy In The Sailor Suit
~Expanded & Remastered Edition (UK)
- 23) JAN JAMES: Justify (USA)
- 24) SYLVIE SIMMONS: Blue On Blue (UK)
- 25) VARO: Varo (Ireland, France, Italy)
- 26) GNOSS: Drawn From Deep Water (Scotland)
- 27) CHARLIE PIGGOTT: The Days That Are Gone (Ireland)
- 28) BESH O DROM: 20 (Balkan)
- 29) ROMUVOS: The Baltic Crusade (Lithuania)
- 30) JEAN-CHARLES GUICHEN: Braz Liver (Bretagne)

Book, Re-issue, USA, British Folk, England, Scotland, Ireland,
USA(Trad), Europe 他, あとがき

(ジャケット掲載分が初入荷と初コメント商品です)

[BOOK]

(国内版)

*NEVER TIRE OF THE ROAD／旅に倦むことなし

～アンディ・アーヴァインうたの世界 ￥1600

(翻訳家で文芸誌「MONKEY」編集長の柴田元幸氏の対訳による Andy Irvine の歌詞集。収録歌詞は Andy がコンサートで好んでうたうレパートリーの中から 21 曲。歌詞集に加え、Andy からの「日本のみんなへ」の挨拶、ディスコグラフィ、バイオグラフィ、Andy の親友で画家の Eamonn O' Doherty による挿画 6 点など全 120 ページ。2020 年ヒマール刊)

※沢山注文を頂きました。今回で最後の販売とします。

[リイシュー/Historic Recording]



(Dianne Davidson 1974) (Mountain Mama) (Amazing Rhythm Aces)

*DIANNE DAVIDSON:1974

A

(スワンプ・クイーン Dianne Davidson の 1971 年の“Baby”、1972 年の“Backwoods Woman”そして 1972 年の三枚目“Mountain Mama”は、スワンプという音楽にハマるきっかけになったアルバムと言っても過言ではないアルバム達。特に“Mountain Mama”には血が騒いだ。学生時代にバイトしていたブラックホークでレコード係&DJ をされていた松平維秋さんは土曜日の「スワンプ特集」で“Mountain Mama”が好きで、よくかけていたっけ。本作は“Mountain Mama”の後のアルバムとして 1974 年に収録されていたのだが、レコード会社が廃業し、お蔵入りになっていたものを Dianne が CD 化して発売したもの。聴くなり、あの時代に聴き親しんだ Dianne のぶっというヴォーカルとあの時代のサウンドに感涙…。録音は“Mountain Mama”と同じナッシュビルの Jack Clements スタジオで、バックミュージシャンは、Mac Gayden, Karl Himmel, Weldon Myrick, John Harris, Ted Reynolds, Buddy Spicher 他に加えて Tracy Nelson 等、“Mountain Mama”の収録メンバーとおおよそ重なる。収録されてから 46 年。今もナッシュビルで活動する Dianne からの嬉しい贈り物。本 CD は米国製ですがラップ包装なしの CD です。1974 年/2020 作。Dianne Davidson)

*DIANNE DAVIDSON:Mountain Mama

A

(メンフィス生まれでテネシー育ちの Dianne Davidson の三枚目。70 年代 SSW 系アルバムそしてスワンプの名盤。「19 歳だった。ナッ

シュビルで晩春だった。世界はまだヴェトナムと戦っていた」と Dianne は本作制作時の思い出を綴った思い出話の冒頭で述べている。Jesse Winchester の“Brand New Tennessee Waltz”や Jackson Browne 二曲 {“Something Fine”と“Song For Adam”や Joni Mitchell の“Carey”等の SSW の名曲をいち早く取り上げ、スワンプ風に料理。改めて聴くと Dianne のヴォーカル自体が「スワンプ」なのを実感。個人的に永遠の名盤。1972 年/2015 作？

Dianne Davidson)

- *AMAZING RHYTHM ACES: Moments - Live In Germany 2000 D
(Russell Smith, Fred James, Billy Earheart, Jeff Stick Davis, Brian Owings から成る Amazing Rhythm Aces の 2000 年ドイツのブレーメンのラジオ曲主催で行われたコンサートの二枚組ライブ盤。全 25 曲。カントリーと南部音楽のルーツ・サウンドを絶妙にミックスした熟達したロックは、いぶし銀の味わいがにじみ出ていて、改めてアメリカン・ロック・バンドとしての偉大さを思い知る。Russell Smith の渋めのヴォーカルも良い味わい。ライブなのに、スタジオ録音レベルの演唱は流石だ。2000 年/2020 作。MIG)



(Allman Brothers)

(Outlaws)

- *THE ALLMAN BROTHERS BAND

: Warner Theatre Erie Pa 7-19-05

¥2890

(Allman Brothers Band {Gregg Allman, Warren Haynes, Derek Trucks, Butch Trucks, Jaimoe, Oteil Burbridge} の 2005 年のコンサート・ライブ二枚組。ツイン・リードギターにツイン・ドラムスそして Gregg Allman の渾身のヴォーカル…まさしく Allman Brothers! The Band の “The Night They Drove Old Dixie Down” や Bob Dylan の “くよくよするなよ” {ヴォーカルは Allman Brothers をバックにした Suzan Tedeschi} や Van Morrison の “Into The Mystic 等のフォークやロックの名曲のほか、Allman Brothers の名曲がずらり。あぶらノリノリの Allman Brothers Band。P20 のブックレットにはライブ写真色々。2005 年/2020 作。Peach)

- *OUTLAWS: Live At Rockpalast 1981

D

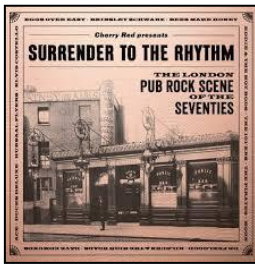
(CD と DVD のセットの二枚組。Freddie Salem, Hughie Thomasson, Billy Jones, Rick Cua, David Dix から成る南部ロック・バンド Outlaws の 1981 年ドイツはローライでのライブ。おお。もうノリノリの南部ロックで突っ走る。その有様は DVD のライブ映像でたっぷり拝める。1981 年/2020 作。MIG)

- *JOHN STEWART: Old Forgotten Altars

A

(副題 “The 1960s Demos。本作は 1965 年～1968 年に Columbus Recording スタジオで録音されたデモ音源曲 18 曲に 1959 年の宅録曲一曲を加えた 19 曲収録盤。2020 作。Omnivore)

(CD/B R I T A I N & I R E L A N D 他)



(London Pub Rock)

*SURRENDER TO THE RHYTHM

“The London Pub Rock Scene Of The Seventies” ¥2790

(英国パブロックのアンソロジー。三枚組ボックスセットで収録曲は何と何と 71 曲。英国のパブロック・シーンは 1971 年の春に米国のバンドの Eggs Over Easy がパブでライブをしたことに始まると解説に書かれている。主な収録バンド/アーティストは、Brinsley Schwarz, Chas And Dave, Meal Ticket, Elvis Costello, Ian Gomm, Ducks Deluxe, Dave Edmunds, Dr. Feelgood, Jess Roden Band, Chilli Willi & The Red Hot Peppers, Kilburn & The High Roads, Mott The Hoople, G. T. Moore, Eddie & The Hot Rods, Kursaal Flyers, Jo-Ann Kelly 等。2020 作。Grapefruit)

[CD/U S A [Folk, Rock] 系]



(Eric Andersen)

(Jeff & Teresa)

(Ad Vanderveen)

*ERIC ANDERSEN:Woodstock Under The Stars ¥3790

(Eric Andersen の三枚組。ディスク 1 は 1991 年から 2006 年に収録されたライブやスタジオ・セッションの音源から 15 曲で共演者は、Happy & Artie Traum, John Sebastian, Garth Hudson, Rick Danko, Jonas Fjeld 他。ディスク 2 と 3 は 2011 年にライブ・ストリーミングされた音源から 22 曲。これは濃厚。まずディスク 1。曲ごとに共演者数は異なるが、何より Eric の魂を振るわず渾身のヴォーカルに身震いしてしまう。Eric は目の前のファンに向かって心を込めて丁寧にうたってる感じだ。ディスク 2 と 3 は Happy Traum, Joe Flood, Inge Andersen, John Sebastian{スペシャル・ゲスト}が共演していて、こちらはこちらで Eric 節が堪能できるが、バンドとして小さくまとまっているのと、Eric の奥方の Inge が控えめに美しいヴォーカル・ハーモニーで参加していて、全体として穏やかな印象を持つ。ただどちらにせよ、これらライブ音源で聴く Eric Andersen は紛れなく“Eric Andersen”であることを実証していて、ファンは感涙なしには聴けない。三つ折りジャケットを開けば、Eric と Eric のウッドストックの音楽仲間との写真{懐かしい顔顔顔}が色々。2020 作。Y&T Music)

*JEFF AND TERESA DAVIDSMEYER:Songs From The Cabin A

(ケンタッキー州のイリノイ川の小屋で作った唄が収録されたという本作。三つ折りジャケットを開けば、本作の主人公のお二人

が笑顔でお迎え。そしてその裏は折り重なってお休み中の二匹のネコ。Jeff のヴォーカルは Jesse Colin Young や Bill Staines をおっとりしたようなゆるゆるの人なつっこいヴォーカル。そのヴォーカルに Teresa が木漏れ日のように優しくハモる。こんな音楽を期待していたが、もうバッチリ。このゆるい唄と音楽の感触は Floating House Band {こっちは海の波に揺られる心地よさだったが} の音楽っぽい。伴奏楽器は Jeff のギター、マンドリン、ハーモニカに加えて、フィドル、12 弦ギター、ティン・ホイッスル、コンサーティーナ、ベース等。70 年代風の嘘みたいに心地よい SSW/フォーク・アルバム。昔の仲良し友達と出逢った気分。ほっこり。2020 作。Deadgoats)

*AD VANDERVEEN:Treasure Keepers A
(Eliza Gilkyson, Iain Matthews と組んだ 2001 年の名盤 "More Than A Song" で知られるオランダの SSW の Ad Vanderveen の新作は、ギターの弾き語りアルバム。2020 年 1 月 18 日に他界した米国の SSW の David Olney との共作 "David And Goliath" で幕開けする本作は、Ad の唄は限りなく優しく、終始何とも言えない哀愁が漂う得も言われぬ珠玉の SSW アルバムとして結実している。6 曲目 "Looking Through Your Eyes" などは、ヴォーカルも曲調も Neil Young の「渚にて」風で、何とも言えない虚しささえ感じられる自作曲で、本作の珠玉さを高めている。一曲のみ自作・共作曲ではない曲が収録されている。その曲は 1970 年代後半に人生を変える影響を受けたという Lee Clayton 作の "If I Can Do It So Can You"。本作は Ad の友人の亡き David Olney に捧げられている。唄は心。名盤誕生。2020 作。Continental)



(Douglas Greer) (Copperhead County) (Chris Smither)

*DOUGLAS GREER:My Last Storm A
(「Townes Van Zandt の唄をうたう Steve Earl」と評されているらしいテキサスを拠点に活動する SSW の Douglas Greer の新作。プロデュースは Eliza Gilkyson や Iain Matthews のプロデューサーとして一目を置く Mark Hallman。Mark のプロデュース、それもおそらく七年振りのプロデュース作品というだけでも、本作への期待は膨らむ。Douglas の唄は昔の Steve Young や昔の Lee Clayton の気骨ある SSW の唄と通底する匂いを保持し、それをフォークというスタイルではなく、Steve Earl や Buddy Miller のようなルーツロックのスタイルでうたい上げていて、ズンズン身体に響く。しかもやはりプロデューサーの手腕は見事で、カントリー、ブルース、ケイジャンなどのルーツ・サウンドを巧みに織り交ぜて、堂々たるルーツロックを魅せつけている。70 年代回帰風であって、音楽は若々しいエネルギーに充ちている。2020 作。Continental)

*COPPERHEAD COUNTY:Brothers A
(おお！Copperhead County なるオランダの南部ロック・バンドの

デビュー・アルバム。僕の耳には Duane Allman 亡きあとの Allman Brothers に 1970 年代の最高レベルの西海岸ロックをミックスしたような最高レベルのアメリカン・ロックをバンバン聴かせる。メンバーは二人の女性バックিং・ヴォーカルを含めて 7 人組。リード・ヴォーカルの Corvin Silvester のヴォーカルは、南部ロック・シンガーの見本のように野太い上に Robert van Voorden のエレキギターはメチャかっこよくて、南部～アメリカン・ロックの濃度を高める。加えて、女性ヴォーカルを伴ったヴォーカルのパワーが凄い。それにしても Corvin Silvester のヴォーカルは凄い。Greg Allman もビックリ！？2020 作。Continental)

*CHRIS SMITHER:More From The Levee A
(ジャケットも歌詞カードも黒づくめ。ジャケットを開くと「2013 年 6 月ニューオーリンズ録音」と記されている。調べてみると本作は、2014 年に 50 年に及ぶ回顧アルバムとして制作・発売された“Still On The Levee”の音源からお蔵入りになったナンバー 10 曲を 18 枚目のアルバムとして発売したもの。なぜ“Still On The Levee”から外されたか、不思議に思えるほど、自身のギターの弾き語りを要にした Chris Smither 節で充ちた静かにおどろおどろしい唄の数々は、得も言われぬ感触。この感触は、彼の一枚目や二枚目を聴いたときに感じた感触と底通っていて、本作では彼の唄独特なとらえどころのないブルージーで妖艶な味わいがピュアに醸し出されている。全てが Chris Smither 印。ゲスト: Allen Toussaint。2020 作。Signature Sounds)

*DAN PENN:Living On Mercyn B
(売時 78 歳の Dan Penn の新作。録音はナッシュビルとアラバマのシェフィールド。バックを務めるスタメンは、マッスルショールズの Clayton Ivey, Michael Rhodes, Milton Sledge, Will McFarlane の面々に加えて、バックグラウンド・シンガー達にホーン・セクション。この布陣は正にスワンプ・サウンドを志向する布陣。好きな心地よく安心できるサウンドの中、Dan Penn 翁のヴォーカルは悠々として穏やか。2020 作。Last Music)

*GOLDEN SHOALS:Golden Shoals A
(Golden Shoals は Mark Kilianski {ホーカル、ギター、バングォー} と Amy Alvey {ヴォーカル、フィドル、ギター} の男女の二人組。二人が愛する音楽は米国のアパラチア音楽やオールドタイム・ミュージックや伝統的ブルーグラス等の白人系米国ルーツ音楽で、二人はそうした音楽のスタイルで、そうした音楽のルーツの味わいたっぷりにオリジナルなフォークを創作する。どのナンバーもオールドタイムな匂いと味わいバッチリ。2020 作。Trade Root)

*ROBERT JON & THE WRECK:Last Light On The Highway A
(Robert Jon & The Wreck は、ヴォーカル&ギターの Robert Jon Burrison が率いる五太郎の南部ロック・バンド。ツイン・ギターは Allman Brothers を思い起こさせ、Robert Jon のヴォーカルとバックグラウンド・ヴォーカルと彼らのロックは、南部ロックに加えて、西海岸ロック風でもあって、パワフル。嘘みたいに凄くてかっこいいアメリカン・ロック。2020 作。Robert Jon Music)

*TERRY ALLEN & THE PANHANDLE MYSTERY BAND
:Just Like Moby Dick A
(Terry Allen の新作！長編小説『白鯨』(Moby Dick)のように)

と題された本作は、冒険心旺盛で様々な悲喜劇が T. Allen のアクのあるヴォーカルで朗々とうたわれる。やや円やかになった印象はあるものの、Terry のヴォーカルの野趣な覇気は変わっていない。Charlie Sexton, Jo Harvey Allen, Bukka Allen, Richard Bowden, Lloyd Maines 等のバックアップはいぶし銀のテックスメックス～テキサス・フォークとして味わいが深い。女性 SSW の Shannon McNally とのデュエットも聞き物。本作発売時、T. Allen は 76 歳。2020 作。Paradise Of Bachelors)

- *DAVE SPECTER:Blues...From The Inside Out A
(Featuring Jorma Kaukonen{ギター} & Brother John Kattke{ヴォーカル、ピアノ、オルガン}の 35 年のキャリアを誇るブルース・ギタリストの Dave Specter のシンガー&ギタリストとしてのデビュー作。ソリッドなブルース・ギターにドラムス、ベースにホーンが加わったブルース～南部ロックは 60 年代後半から 70 年代のブルース系音楽のコアの味わいとパワーを保持し、しかも Dave Specter のヴォーカルは 70 年代の南部系 SSW のようなニューボーとした味わいを発散していて、何とも味わい深く魅力的。ゲスト・シンガーだが、シカゴを拠点に活動する女性 SSW の Sarah Marie Young のソウルフルな南部ロックは、だめ押し的に圧巻。2019 作。Delmark)

[CD/CANADA]

- *HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA:Angels In The Snow a
(オランダのヴェテラン・アメリカン・ロック・バンドの Hidden Agenda Deluxe がカナダの女性 SSW の Oh Susanna をメンバーに招いて制作したクリスマス・アルバム。The Band の“Island”収録の“Xmas Must Be Tonight”で The Band 風いぶし銀ロックで幕開ける本作は、いぶし銀アメリカン・ロックから SSW 風そして Oh Susanna のヴォーカルをフィーチャーした女性 SSW 風と聴かせ所色々。2018 作。Continental)
- *KEN WHITELEY:Calm In The Eye Of The Storm B
(1951 年生まれの K. Whiteley の新作。彼の南部音楽志向は Chris & Ken Whiteley の Whiteley Brothers のデビュー時から不変。そんな南部音楽を糧にして自分の音楽を育んできた K. Whiteley の本作は、彼の体にしみ込んだ音楽を優しい気持ちで、ラップスティールやマンドリンを奏でながら、女性バックিং・ヴォーカル等の助っ人を得て、ゴスペルやブルースの南部音楽の味わいを損なうことなく、ゆったりと演唱したもの。第一印象は一枚目から三枚目で魅せた初期 Ry Cooder 風音楽だが、年の功というか、音楽がふくよかで優しい。静かな名盤。2020 作。Borealis)

[CD/UK, IRELAND]

- *KATE RUSBY:Hand Me Down B
(Kate Rusby の本作は James Taylor や Ron Davies [Kinks] や Bob Marley 等等フォークやロックのナンバーのカバー・アルバム。本作は BBC2 ラジオ番組のリハーサル中に生まれたアルバムだそうので、「ステイホーム」向きのアルバムとしてより親近感が持てるアルバムになっている。収録は自宅のスタジオでご主人の Damien O' Kane の各種ギター、バンジョー等による伴奏は卓越していて彩り豊かで、Kate のいつもよりリラックスしてにこやかそうな唄をよりハッピーに彩っている。聴き終わって心ほん

わか。2020 作。Pure)

*SYLVIE SIMMONS:Blue On Blue

A

(ロンドン生まれで現在カリフォルニアを拠点に活動している米英 SSW、米英ロックの著名音楽ジャーナリストで、遅咲きの SSW でウクレレ奏者の Sylvie Simmons の新作で二枚目。本作は本作の収録曲のうち 5 曲のファースト・テイクを収録した後、複雑骨折に見舞われ、左手が使えなくなり、新曲を数曲作曲し、本作を完成させたという。2014 年作の“Sylvie”は「女 Leonard Cohen」と評されて話題になったようだが、本作も「女 Leonard Cohen」の匂いが立ちこめている。低いキーでゆるくうたう彼女の唄はウクレレの和みの音色を伴って、夢心地な不思議に心地よい唄の世界が生み出されている。2020 作。Compass)

*RORY BUTLER:Window Shopping

B

(スコットランドから素晴らしい若者 SSW がデビューした。聴きながら思い浮かべたのは、内面的に自由な音楽は John Martyn, Nick Drake。今を生きる若者 SSW の音楽と暗鬱とした中で浮遊するような深みのある 70 年代 SSW の音楽とは安易に較べられはしないが、彼らが創り出した英国フォークの伝統を栄養分にして、ギターを爪弾き自由自在に自分の唄をうたう。彼の軽やかな唄とギターの多彩さが実に心地よい。w. Matt Ingram {ドラムス}, Tom Mason{ベース}, Euan Burton{ベース}, Nick Pini {ダブルベース}。2020 作。Vertical)

*NED ROBERTS:Dream Sweetheart

B

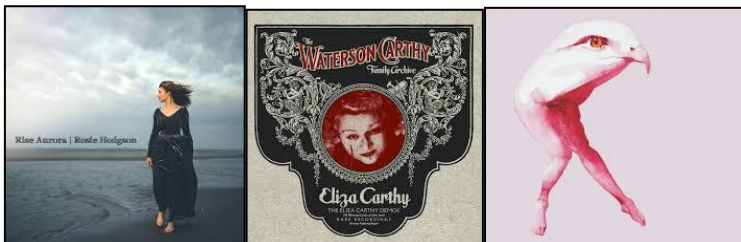
(前作“Outside My Mind”から三年。1970 年代の陰りの感じられるあの時代の英国 SSW っぽいヴォーカルとサウンドに舌鼓を打った前作同様本作も変わらない「ヒューマン・ソング」に舌鼓。プロデューサーも前作と同じ Luther Russell で録音もロス。Ned のギターの弾き語りベースだが、ほどよくロックもして、Ned の唄の内向きで心優しい唄と音楽は、1970 年代風のブリティッシュ・フォーク～ロックの良き香りをほのかに立てていて、胸キュン！ 2020 作。Aveline)

*ADAM AMOS & NOEL ROCKS:Back Up To Zero

A

(Welcome Back! と心で叫びたくなるエディンバラのフォーク・デュオの二十数年振りの新作。二人が奏でるバンジョーとギターの音色に乗って、ソロで、そしてハーモニーでゆるくうたわれる唄は、牧歌的でほのぼのと自分の人生を振り返るような心の安らぎ感がある。Heron や Ronnie Lane のファンは是非。w. David Paton {元 Pilot/ベース}, Kenny Hutchinson {アコ、ピアノ}, Su-a Lee {チェロ}。工作中的愛聴 BGM。2020 作。Amos and Rocks)

[CD/ENGLAND]



(Rosie Hodgson)

(Eliza Carthy)

(Eliza Carthy & Ben Seal)

*ROSIE HODGSON:Rise Aurora

B

(Wilderness Yet のシンガーの Rosie Hodgson {ヴォーカル、ギター} 嬢のデビューソロが 2016 年に発売されていたことがわかり、Wilderness Yet のメンバーで本作の共演者の Rowan Piggott {ヴォーカル、フィドル} に連絡を取って仕入れた。当たり前！Wilderness Yet で惚れ込んだ「英国トラッドの伝統的スタイルに強く影響を受けた Rosie のシンギング、それも清楚で若々しいシンギングの魅力は絶大」なことは本デビュー作においても不変。むしろその清楚で若々しいシンギングはその素の魅力をナチュラルに発散していて、胸キュンさは絶大。Rosie のソロ名義だが、事実上 Rowan Piggott とのデュオ・アルバムで、Rowan の寄り添うフィドルとヴォーカル・ハーモニー {Rowan のシンギングは毅然としていて実に見事} は、ほんのりとした優しさやぬくもりを添えている。二人のシンギングと演奏は花畑で仲良く舞う二羽の蝶のように自由でほほえましく絶妙。イングランドのトラッドとしてもブリティッシュ・フォークとしても秀逸。トラッドと自作曲が混在するが、気高いトラッド曲とトラッド調の清純な自作曲との微妙な組み合わせが本作を美しく彩りのあるものになっている。2016 作。Rosie Hodgson)

*ELIZA CARTHY: The Eliza Carthy Demos B
(副題“*The Waterson-Carthy Family Archive*”。Eliza が Martin & Norma の両親と組んだ“*Waterson-Carthy*”による 2001 年のデモ音源からの 10 曲と Eliza の 2011 年のアルバム“*Neptune*”のデモ音源から 5 曲の計 15 曲収録の編集 CD。僕がデンマーク {Tonder Festival} で“*Waterson-Carthy*”のライブを観たのは 2002 年の夏。ライブでは Eliza と Norma の母娘が引っ張る役を担っていて、Martin は影が薄かった。本作は *Waterson-Carthy* の音源から Eliza のヴォーカルをフィーチャーしたナンバーを選んでいて、フォーク・シンガーとして Eliza が最も輝いていたし、評価されていた時代の Eliza のヴォーカルが楽しめる。その一方で後半の“*Neptune*”のデモ音源の方は大人の SSW として抜け替わり、羽ばたく Eliza のアンニュイなヴォーカルが楽しめる。2020 作。Hem)

*ELIZA CARTHY & BEN SEAL: Through That Sound C
(Eliza Carthy の新作は Ben Seal なる音楽家とのコラボで 10 曲中 9 曲が二人の共作。おそらく歌詞が Eliza で Ben が作曲。トラッドではない。かと言って、SSW やフォーク系でもない。奇抜なヘアースタイル、奇抜な化粧をした Eliza がうたう世界は、かつてあったキャバレーやジャズクラブのような退廃的なムード漂う世界。しかしムードはそうだが、Ben によって組まれた弦楽四重奏バンドによるジャジーな音楽は、幻想的で挑戦的で挑発的。Eliza は仮想世界の歌姫になって、世間体を気にせずに歌舞 {かぶ} いている。副題の“*My Secret Is Made Known*”は「私の秘密がばれちゃった」と訳せばよいでしょうか？2020 作。Hem Hem)

*THE GIFT BAND: Live On Tour B
(二枚組。Eliza Carthy, Norma Waterson, Martin Carthy の *Waterson-Carthy* に Phil Alexander, Aidan Curren, David Donnely を加えた Gift Band の 2010 年の事実上 *Waterson-Carthy* のコンサート・ライブ。ライブでは Martin の影が薄く、大らかな Norma と Eliza の母娘の存在感が大きい。2011 作。Scarlet。検品してお送りします)



(Rheingans Sisters)

*THE RHEINGANS SISTERS:Receiver B

(イングランドの Anna {ヴォーカル、フィドル、5弦バンジョー、タンバリン、ハモンドオルガン他} と Rowan {ヴォーカル、フィドル、ヴァイオリン、各種バンジョー、ポケット・ピアノ他} の Rheingans 姉妹の新作で四枚目。プロデュースは Fay Hield の新作や Jenny Sturgeon の新作の Andy Bell。簡易なジャケットが多い中で、アート感覚のほぼ 50 ページに及ぶ分厚いブックレット付の豪華ジャケット。二人の自作曲が 8 曲とトラッド曲が 4 曲。英国トラッドと北欧のフィドル・ミュージックに造詣の深い姉妹だが、双方の音楽のエレメントを基礎にして、各種楽器を操り、イマジネーション豊かに悪魔も登場する独自の空想的なフォーク・ミュージックを創作している。音楽要素はいたってトラディショナルでありながら、生まれた音楽は極めてオリジナル性が高く、汎ヨーロッパ的。演奏技術も精神も音楽の質も極めて高い。2020 作。Bendigedig)

《余談》

※本 CD を聴く前、Fay Hield の新作や Jenny Sturgeon の新作を聴いたとき、昔 Nic Jones の "Noah's Ark Trap" に感じたような「一歩先を行くトラッド」のような印象を持ち、二作のプロデューサーの Andy Bell 氏に「What do you think is important to consider when producing a folk album? (フォーク・アルバムをプロデュースする際、何が大切と考えていますか?)」とメールで尋ねてみました。答えはこうでした。

フォークだけでなく、どのアルバムでもそうですが、それが単にストーリーを語っているだけなのか、それともそのストーリーが全体像にどのように適合するのか、アーティストがアルバムから何を得たいのかを確実に見つけます。

一般的に作られる音楽には理由や目的があります。私はアーティストと、それをどのようにして達成するかを話し合います。私は一般的にアーティストに革新的であるように、そして彼らの快適ゾーンから外に出て考えるようにと促しています！

もしあなたが「だれのアルバムをプロデュースするのが夢？」と聞いたら、…maybe Richard Thompson, Bon Ver かな。それと Anaias Mitchell もかな。

*CHRIS LESLIE:Fiddle Back B

(Fairport Convention のヴォーカル&フィドルの Chris Leslie のソロ・アルバム。新型コロナ禍のロックダウンでツアーやライブが行えない状況下、バランスを保つためにやりたいことは何か、前向きに心をから作りたいと思うものは何かを考えた結果が本作を作る考えに至ったそう。収録場所は Chris の自宅。フィドルとヴォーカルが中心の完全ソロだが、使用楽器はフィドルを含めて 13 台。収録曲 13 トラックの内 7 トラックがトラッド曲で 6 トラックが自作曲。新型コロナ禍がなければ、生まれ得

なかったイマジネーション豊かな素晴らしい音楽だ。唄も演奏も旅する心に満ちて、自由を謳歌している。2020 年作。Paws)

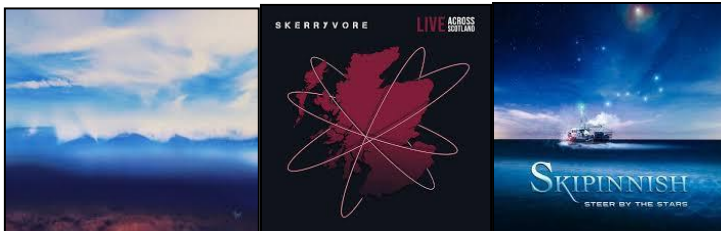
*CHRIS LESLIE WITH BERYL MARRIOTT:The Gift B
(1994 作。Beautiful Jo)

*DAVID HUGHES & CHRIS LESLIE:Acoustic Christmas ¥1400
(英国の SSW の D. Hughes と Fairport のシンガーの C. Leslie の夢の共演盤。ギターとマンドリンの伴奏による耳と心に新鮮なクリスマス・ソング集。全 6 曲の 24 分。簡易紙ジャケット仕様。1998 作。Folk Corporation)

*ROSIE CARSON & KEVIN DEMPSEY:Nightbirds B
(Dando Shaft、Whippersnapper のギター奏者でシンガーの Kevin Dempsey とアイリッシュ系フォーク・シンガーでフィドル奏者の世代違いの男女のデュオ。Kevin は Rosie という美しい花を得て、Kevin の英国フォークの美学を深めた独自の英国フォークを開花させていて、もううっとり。小春日和な日にのほほんとして聞いていたくなる。トラッド曲と自作等の SSW 系の曲が半々。2016 作。Haystack)

*AVOCET:Lend Your Garden A
(Avocet は 12 歳のときにサマースクールで出会い、その後 60 年代のフォークやブルースに恋に落ちたという Sam Grassie {ヴォーカル、ギター、エレキギター} の Iona Zajac {ヴォーカル、クラシック} の男女のデュオ。12 曲中、Davey Graham 作“Angie” {本作の曲名は“Angie’s Cradle”} の一曲以外は全曲 Avocet の自作曲。なのに Bert Jansch や Pentangle の音楽の香りがふわふわと立ち上っている。2020 作。Avocet)

[CD/SCOTLAND系]



(Jenny Sturgeon)

(Skerryvore)

(Skipinnish)

*JENNY STURGEON:The Living Mountain B
(Northern Flyway, Salt House の Jenny Sturgeon {ヴォーカル、ギター、ピアノ、ハーモニカ、タムタム、ホイッスル、シッセル、フィールドレコーディング} の新作。プロデュースは Salt House、Fay Hield の“Wracklin”の Andy Bell。アルバム・タイトルは 1940 年代に Nan Shepherd が Jenny が育った Cairngorm について書いた書名で、音楽は彼女の詩に曲を付けた曲や彼女の詩に触発されて、Jenny が作詞作曲した自作曲。初めて Jenny の唄を聴いたとき、Karine Polwart に似てると思ったが、この Jenny のどこか不思議で静寂な空気が漂うソロを聴いて、Karine が Jenny の影響を受けているとさえ感じられる凛として柔軟でありながら、揺るぎない意志が貫かれたシンギングであり、音楽世界にむしろ Jenny の大器を感じた。Jenny の心は 1940 年代の“The Living Mountain”の世界へとタイムスリップし、スコットランドの風土に根ざして野生的で想像力に富む唄と音楽は高潔無比の優れた SSW の音楽として、かつ英国のフォーク・ミュージックとして傑出している。w. Andy Bell {シッセル、パーカッション、ヴォーカル}

-カル), Mairi Campbell {ヴ ィョウ、ヴ ォーカル}, Su-a Lee {チエロ}, Grant Anderson {ヴ ォーカル、ベ ース}。名盤誕生。2020 作。Hudson)

*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway A

(Northern Flyway は Salt House の Jenny Sturgeon {ヴ ォーカル、ア ーモニウ ム、タ ーブル} とシンガーでマルチ楽器演奏家の Inge Thomson {ヴ ォーカル、アコ、親指ピ アノ、フルト、シセ、ウェブド ラム他} の二人が立ち上げた鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込んだ本作は、同じレ ーベルから発売された Karine Polwart {Inge Thomson は Karine Polwart Band のメンバー} の自然環境保護への思いを込めた “A Pocket Of Wind Resistance” と通底する夢のように清々し いスコティッシュ・フォーク/トラッド・アルバム。2018 作。 Hudson)

*SERRYVORE:Live Across Scotland C

(現在八人編成のスーパー・スコティッシュ・フォーク・ロック・バ ンドに成長した Serryvore の新作は、2004 年に Daniel Gillespie と Martin Gillespie 兄弟、Fraser West そして彼の友人の Alec Dalglisch の四人編成で結成されたバンドで、本作は彼らの結成 15 周年を記念して発売された彼らが冬に行ったスコットランド ツアーのライヴ音源から 15 曲を収録したライヴ・アルバム。 “Scots Trad Music Awards” の “Live Act of The Year” 賞を受賞 している彼らの本領が存分に楽しめる内容で、リード・ヴォーカ ルの Alec Dalglisch ヴォーカルをはじめ、二台のバグパイプ、ア コ、ホイッスル、フィドル、キーボードそしてベース&ドラムス で固めたバンドが体現したフォーク・ロックは、Runrig 級にスコ ティッシュ・スピリットが高く、ファンに密着したライヴで鍛え た底力があって圧巻。気分爽快！2020 作。Tyree)

*SKIPINNISH:Steer By The Stars C

(いつの間にか結成 20 周年を迎えたスコットランドの大衆的人気 のトラッド・グループの “Skipinnish” の新作で八枚目。メンバー でフィドラーの Archie McAllister の誕生日を祝ったアルバム とか。久々に聴く Skipinnish にビックリ！元々酔っ払いが好む 陽気なダンス・バンドの印象が強かったが、Norrie MacIver のヴ ォーカルはスコティッシュ魂がみなぎっているし、二台のハイ ランド・バグパイプ+アコ、フィドル、ピアノ+ベース&ドラム スによるフォーク・ロックは、いつの間にやら Runrig 風になっ ている。もちろん酔っ払いが好む陽気なダンス・バンドのパワーを 保持しながら。ゲスト:Rachel Walker, Brian Hurren {Runrig}, Malcolm Jones {Runrig}。キャリアが音楽を育てる。2019 作。 Skippinish)

*BRIAN Ó hEADHRA & FIONA MACKENZIE:Tuath B

(副題 “Songs Of The Northlands”。Anam や Cruinn で共にゲール語 によるスコティッシュ・トラッドの創作と普及にケルト音楽シ ーンの最前線で尽力してきた Brian と Fiona の新作。そのポジテ ィヴな姿勢は本作でも不変。本作ではスコットランドのゲール語ソ ングのみならず、アイルランドのゲール語ソングやガリシア語の 唄をゲール語に変えてうたったり、男女のシンガーによるスコテ ィッシュ・トラッドの旨みと魅力を伝統的スタイルできっちりと 表現した上で、多彩なリズムを取り入れた先進的サウンドとのコ ラボにも果敢に挑戦している。そうした音作り云々を超えて、二 人の魂のシンギングは心に響く。歌詞英訳付。2020 作。Naxos)

*FINDLEY NAPIER & GILLIAN FRAME WITH MIKE VASS

:The Ledger

B

(1950年代後半から60年代初めに新聞“The Scotsman”にスコットランドの伝統音楽の紹介記事が載ったという。その記事を書いたのは民俗学者のNorman Buchan。後にその記事から出版されたのが“101 Scottish Folks Songs”。Findleyの祖父はその記事をノート“Ledger”に切り貼りして、本作は切り貼りされた伝統歌の中から10曲をFindley & Gillianのシンギングと三人の伴奏で愛情深く演唱したもの。Findleyのシンギングは柔和ながら毅然としていて、Gillianのシンギングは気品があって優美。この全くの理想のシンギングがハモるとスコットティッシュ・トラッドの旨みが一段と増す。名盤誕生。2020作。Cherrygroove)

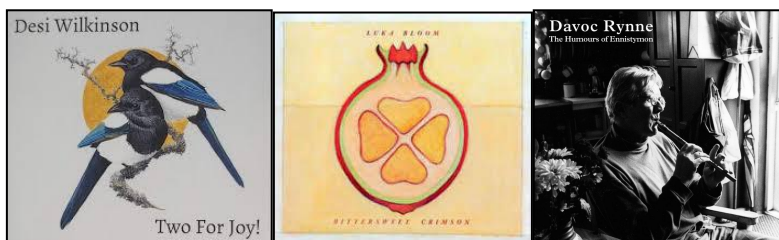
*HILARY DE VRIES:雨のち桜

B

(スコットランドの女性ハープ奏者ヒラリー・ドゥ・ヴリースの金属弦の小型スコティッシュ・ハープ“クラルサツハ”によるハープソロ。音楽はカナダの詩人Robert MacLeanが日本を舞台に詠んだ詩にHilaryが曲を付けて演奏したもので、曲数は24曲。音楽は静寂感があって日本情緒が感じられるものだが、一音一音にキラリ感のあるきらびやかな音色は、光に当たって輝く雨つぶや清らかな水の流れるような印象で、クラルサツハならではの美しい音楽の世界が創り出されている。もちろんその音楽は日本の桜や四季の彩りや風景などをテーマにした詩を味わう感性と作曲家としての才能と演奏力があってのことだが。ハープの音はチターの音のようにも聞こえる。心が洗われるような音楽。短い解説文には日本語訳が付いている。2020作。Boarstone)

[CD/IRELAND系]

デジパック・タイプを含め、元々開封されているものが多数あります。



(Desi Wilkinson)

(Luka Bloom)

(Davoc Rynne)

*DESI WILKINSON:Two For Joy!

B

(Cranのメンバーで屈指のフルート奏者&トラッド・シンガーのDesi Wilkinsonの新作。何と奥深いベルファスト出身のDesi目線のアイリッシュ+α。彼の故郷の北アイルランドやドニゴールやスライゴーなどアイルランド北部の唄や曲に加えて、ブルターニュやスコットランドの曲などをフルート、ホイッスル、スモールパイプス等で演奏し、またシンギングし、リルティングもする。その妙技は決して一様ではなく、各曲各曲生命力があって、一曲一曲にDesiの並々ならぬ曲や唄への思いと情熱が注がれていて、味わいが深い。その味わいの深さは長年のライブ活動を通して培われたフォーク・ミュージックへの思いや愛情の深さによるものと、彼の一様ではない曲ごとに魂のこもった演奏や唄を聴いて思う。長い活動歴とミュージシャンとの交流・交歓がなければ、生まれ

得ない豊かなアイリッシュ+αな音楽だ。Desi は曲の解説の前に「友情と励ましが私を動かし続けてくれた。生きている人にも亡き人にも心から感謝します」と述べている。ゲスト:Colm Murphy {ハウロン}, Garry O' Briain {マントチェロ、ギター}, Patrick Molard {リアンパイプス}。2020 作。Desi Wilkinson)

*LUKA BLOOM: Bettersweet Crimson

G

(数々の名盤を発表してきた Luka Bloom の 22 枚目。アイルランドがロックダウンする直前に収録されたという。ケルト詩人的な感性を秘めた自然愛や人類愛を詩にした Luka の唄は、何と穏やかな心に満ちて、唄も音楽も繊細で哀愁を帯びていることだろう。そんな Luka の唄は、心からの祈りのようにも聞こえる。終始、Luka の美しい唄を彩る Steve Cooney の美しいアコースティック・ギターとブズーキが素晴らしい。彼のギター&ブズーキは正に魔法のサウンド！加えてスライゴーの女性シンガーの Niamh Farrell の絹の肌触りのヴォーカル・ハーモニーが Luka の唄の世界に哀感を添えている。これほど真の優しさに満ちた SSW/フォーク・アルバムを聴いたことがない。8 曲目“Who Will Heal The Land”と 11 曲目“The Hunger”は世界がコロナ禍で苦しむ今だから余計に心に沁みる唄だ。ちなみにタイトルのペルシャのザクロから採ったタイトルで、ジャケットもブックレットも薄い{ザクロの}クリームゾン色に染まっている。名盤誕生。2020 作。Big Sky)

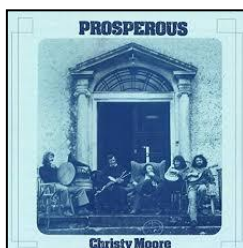
*DAVOC RYNNE: The Humours Of Ennistymon

B

(Christy Moore の妹で Luka Bloom {Barry Moore} の姉 Anne Rynne のご主人の Davoc Rynne の自身のティンホイッスルをフィーチャーした 2012 年のアルバム。仕入れるのも聴くのも初めて。本作は Christy Moore, Anne Rynne, Luka Bloom の三兄妹と Quentin Cooper や Eoin O' Neill 等クレアの音楽仲間と行ったアットホームな雰囲気のアリッシュ・セッションで、Anne がうたい、Christy もうたっている。Luka がギターの担当。収録時間はわずか 6 時間。どこでも聴けるようなアリッシュのオンパレードだが、澁刺としたなホイッスルの音色とホイッスルを中心にした少人数による様々なアリッシュ・サウンドは最高に心地よい。ラストを飾る“The Road To Abbeefeale”では Christy がうたい始めると、誰かさんが続き、二人のかけ合いになって、曲の後半は全員による和気あいあいなセッション&シンギングで幕。終始ほほえましいアリッシュ。全 15 トラック/20 曲。2012 作。Davoc Rynne)

《余談》

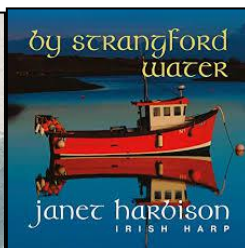
Christy Moore の妹さんの Anne Rynne さんが「このアルバムはとてもオーガニックでした。リハーサルはなかったし、演奏する曲目リストもありませんでした。思った通り、ハプニングの連続だったんですよ」と教えてくれました。



(Christy Moore)



(Aoife Blake)



(Janet Harbison)

*CHRISTY MOORE:Prosperous

A

(Christy Moore の 1972 年作の二枚目“Prosperous”がめでたくデジタル・リマスターで CD 再発された。ブックレットにも書かれているが、本作は Christy Moore が Bill Leader と出逢ったときに考案され、二人が話し合っただけで集めた共演者が Andy Irvine, Donal Lunny, Liam O'Flynn に Kevin Conneff, Clive Collins, Dave Bland で、本作がきっかけで Planxty が誕生したという話は有名。だが、アルバム・タイトルの“Prosperous”が Christy, Andy, Doanl, Liam が打ち合わせに使ったのが Christy の妹さんの Anne Rynne のお宅。そのお宅があったところが“Prosperous”という場所ということはあまり知られてないかも。こうして生まれた本作は、Christy Moore の穏やかなシンギングをフィーチャーした Planxty 劇場開幕前のクリーミーでフレッシュな Planxty Music。場をわきまえた Andy は、アイリッシュなマンドリンの演奏に専念。不滅名盤。1972 年/2020 作。Tara)

《余談》

※Anne Rynne さんに録音した場所を尋ねてみました。Anne さんの家の地下室の古い台所で一週間以上かけて録音したそうです。その家はご主人の Davoc さんの生家だそうです。

*CHRISTY MOORE:Ordinary Man

a

(1985 年作。WEA Ireland。検品をしてお送りします)

*CHRISTY MOORE:Unfinished Revolution

a

(1987 年作。WEA。検品をしてお送りします)

*CHRISTY MOORE:Voyage

a

(1989 年作。米 Atlantic。検品をしてお送りします)

*CHRISTY MOORE:King Puck

C

(1989 年作。米 Atlantic。検品をしてお送りします)

*CHRISTY MOORE:Lily (2016 年作。Columbia)

a

*AOIFE BLAKE:The Green Hills

B

(カウンティー・ゴールウェイのミルトンという町で子どもの頃からアイリッシュ・ミュージックに親しんで育ったという若き女性ハーブ奏者の Aoife のデビュー作。ソロで、またグループで演奏する彼女のアイリッシュを中心とした音楽は、アイリッシュ・ミュージックを心と体で消化した上で、Aoife 自身のアイリッシュな音楽として創作していて、一曲一曲が様々な輝きに彩られていて、心洗われ、心ウキウキしてしまう。優雅な演奏やもの凄くハイテクな演奏など曲調も演奏形態も様々なのだが、音楽として印象は、曲と曲のつながりが風の流れるようにスムーズで、爽やかさや清々しさや優しさを感じられるもの。こんなアイリッシュは中々お耳にかかれぬ。昔 Parson's Hat というグループがいたが、彼らの風薫る爽やかなアイリッシュを思い出した。そうそう Aoife は伝統歌二曲 {一曲は英語でもう一曲はゲール語} で素朴で美しいシンギングを披露。w. Ryan McAuley {ハヅォー}, Gaolán Keogh {フトル}, Ciara O'Leary Fitzpatrick {コンサーティナ}, Ultan Lavery {フトル}。偶然だが、Aoife 愛用のハーブは {生山} 早弥香が愛用しているハーブと同じハーブ職人が製作したハーブ。早弥香曰く「今キンキンしたハーブが多いけど、このパディーのハーブの音は優しい」と。それでか、一曲目のジグを聴いたとき、無意識に親近感覚えたのは。2020 作。Aoife Blake)

*JANET HARBISON:By Strangford Water

C

(Michael Rooney や Gráinne Hambly や Laoise Kelly 等の著名なアイリッシュハープ奏者の師として、また Irish Harp Centre の創設など、演奏家の育成とアイリッシュハープ音楽の教育と普及に尽力してきたアイリッシュハープ奏者の Janet Harbison の新作。全曲フランスの Camac 社の「ジャネット・ハープ」[このハープが生まれた経緯が「Farewell Joel」という曲に詳しく書かれている。ちなみにそれまでの約 40 年間は青山ハープを弾いていたそうだ]の完全ハープ・ソロ。本作はダブリンそしてベルファストそしてリムリックと活動拠点を移し、現在英国のワーウィックという町で暮らす、現在 60 歳代半ばの Janet のハープ人生を振り返る選曲 [ブックレットには思い出の写真色々]なのだが、爪弾き出された音楽はポジティブでハイテクで鮮やかなハープ演奏の連続で、まさに今が旬のアイリッシュハープ演奏の連続。多くのハープ演奏家を育成し、世に送り出してきた Janet ならではのハープの師らしい揺るぎないハープ・ソロだ。かつてなく音楽が輝いている。全 12 曲、Janet の思い出が綴られている。2020 作。Janet Harbison)

※本 CD は(生山)早弥香ハープ教室で完売し、11 月 13 日頃再入荷の予定です。



(Outside Track)

(Pat Walsh)

*THE OUTSIDE TRACK:Christmas Star

C

(待ってました！リムリック大学の学生だった時代に出逢ったのが縁で誕生したアイルランド、スコットランド、カナダ、ノヴァスコシア出身による女性四人のケルティック・バンドの Outside Track～Teresa Horgan{ヴォーカル、フルト}、Ailie Robertson{ハープ、ヴォーカル}、Fiona Black{アコ}、Mairi Rankin{フイドル、ヴォーカル}～の新作はクリスマス・アルバム。彼女達の女子会のノリの汎ケルティックな音楽は本作でも絶好調。そのノリの良さと卓越した演奏力と若々しいセンスに裏打ちされていて、スカッと清々しい。しかもスコットランドのギター名手でシンガーの Ewan Robertson がほぼ全曲ギターで参加していて、スーパー・ケルティック・トラッド・バンドのレベル。リード・ヴォーカルの Teresa 嬢のシンギングは、クリスマスのムード充滿で清らかに輝いている。今年のクリスマスは本作で決まり！2020 作。The Outside Track)

*PAT WALSH:Simply Whistle

B

(50 年間マンチェスターのアイリッシュ・ミュージック・シーンで活動し、マンチェスターで最高のホイッスル奏者と評価されている女性ホイッスル奏者の Pat Walsh のソロ。Mike McGoldrick のプロデュースで、大半の曲で John Doyle がギター、ブズーキ、マンドラでバックアップしている本作だが、生粋のアイリッシュ・ホイッスル・ミュージックというか、かつてアイルランドの大衆音楽として親しまれていたホイッスルの音楽が、今 Pat の演奏で甦ったかのような何とも不思議な懐かしさを感じられる最高に気持ちの良いホイッスル・アルバム。Micho Russell が{John と Mike の

伴奏で}おしゃれしてご機嫌に吹きまくっている感じか。Pat のホイッスルはよくうたう。音楽が人を結ぶ。たかがホイッスル。されどホイッスル。全 19 トラック/39 曲。2020 作。Bunowen Music)

*VARO:Varo ¥2390

(Varo は Lucie Azconaga {ヴァーカ、フィドル、ハーモニウム、ウクレレ} と Consuelo Nerea Breschi Varo {ヴァーカ、フィドル、バウロン} のフランス人とイタリア人のアイリッシュ・トラッドの女性二人組。曲目はアイリッシュ中心だが、イングランドのトラッドの名曲“Savoy”なども演唱していて、二人のトラッドへのアプローチは、70 年代の英国フォーク的で、70 年代のブリティッシュ～アイリッシュ・フォーク的な上品さや芳香が感じられる音楽。ゲスト:Helen Diamond {ヴァーカ}。2020 作。Varo)

*MIKE MCGOLDRICK・JOHN MCCUSKER・JOHN DOYLE

:The Reed That Bends In The Storm B

(アイルランドとスコットランドのケルト音楽家によるスーパー trio～M. McGoldrick {フルト、ホイッスル、リアンパ イブス、バウロン、ギター、パーカッション}, J. McCusker {フィドル、ホイッスル、ハーモニウム、アコ}, J. Doyle {ヴァーカ、ギター、ブスーキ、マンドラ}～による天下一品のアイリッシュ・ミュージック・アルバム。2020 作。Under One Sky)

(Black Family の Michael & Shay Black 兄弟の新作。プロデューサーに John Doyle を迎えて、Mike McGoldrick, John McCusker, Mick McAuley, Eamonn Flynn 等の名演奏家とブラック家の親族が一堂に会して、Michael & Shay の兄弟がうたって、妹たちや姪などが仲間入りしてうたったファミリー・アルバム。2020 作。The Black Brothers)

*MICHAEL AND SHAY BLACK:Glackanacker B

(Black Family の Michael & Shay Black 兄弟の新作。プロデューサーに John Doyle を迎えて、Mike McGoldrick, John McCusker, Mick McAuley, Eamonn Flynn 等の名演奏家とブラック家の親族が一堂に会して、Michael & Shay の兄弟がうたって、妹たちや姪などが仲間入りしてうたったファミリー・アルバム。2020 作。The Black Brothers)

*SHAY, MICHAEL & MARTIN BLACK:What A Time A

(1995 年録音のブラック・ファミリーの三兄弟のアルバム。Produced by Maire Breatnach. w. Maire Breatnach, Mairtin O' Connor, Tommy Hayes, Neol Eccles, Garvan Gallagher, Greg Boland, Seamus Brett 他。1995 作。Dara)

*MICHAEL BLACK:Michael Black A

(2007 年リリースの Michael Black のソロ。w. John Doyle, Seamus Eagan, Liz Carroll, John Williams に Black Family 他。Compass)

*YE VAGABOND:Hare's Lament C

(Ye Vagabond は Brian & Diarmuid Mac Gloinn の兄弟デュオ。本作収録のアイルランドの伝統歌は祖父のアーカイブ音源から学んだという。その音源が何かは分からないが、彼らがブズーキ、ギター、マンドリン、フィドルの伴奏で自然体で創り出すアイリッシュ・フォークは、70 年代の Andy Irvine や Paul Brady や 70 年代の英国のトラッド・シンガーを想起させる。2019 作。River Lea)

*TWEED & CUTTING:One Roof Under B

(Kren Tweed と Andy Cutting の 2002 年のアルバム。1994 年のアルバム“Across The Waters”で共演を通して、二人はお互いの音楽から

多くのことを学んだという。その結果生まれたのが、このピアノ・アコーディオンとメローディオンのデュオ・アルバム。二人は、アイリッシュを中心にイングランド、北欧の音楽を「この曲知ってる？この曲は？このスウェーデンの曲は？」等とお互いが楽しみ合って演奏しているのがピンピン伝わってくる。お二人さんが音楽にたっぷり夢を見ていた時代の輝かしい音楽。1990年代末に Sileas の Patsy Seddon さんに逢ったとき「Karen は Andy Cutting が好きなのよ」と言っていたのを思い出した。ゲスト: Ian Carr。
1994 作。Fasco)

- *BIRKIN TREE: Five Seasons B
(イタリアのアイリッシュ・ミュージック・バンドの Birkin Tree の驚きの新作。Mick O'Brien の娘で RTE RnaG フィドル・コンペティションで優勝経験のあるフィドル奏者の Aoife Ní Bhriain がリーダーシップを発揮して演奏して制作されたもので、セッションから生み出されるアイリッシュの何とハイレベルなこと！
加えてヴォーカルの Laura Torteirolo 嬢のアイリッシュ・スタイルのシンギングが滅茶苦茶素晴らしい。2019 作。Felmay)
- *BIRKIN TREE: Virginia A
(Martin Hayes & Dennis Cahill がゲスト参加の Birkin Tree の 2010 年のアルバム。2010 作。Felmay)
- *PHILIP DODDY: Yellow Moon On The Rise A
(スライゴーのトラッド・シンガーの Philip Doddy の三枚目。Philip は一度聴くと心に焼き付く独特な味わいのあるシンガーで、“As I Roved Out” や “The Mountains Of Pomeroy” や “On Raglan Road” 等などトラッドの名曲を侘び寂びの節回しで、自身唄に酔い、じっくり味わうようにシンギングする。Caroline Locke のピアノの伴奏と Brian McDonagh のマンドーラの伴奏で、聴き親しんだアイルランド民謡がまた違った味わいで味わわしてくれる。スルメ味のアイルランド民謡。2017 作。Philip Doddy)
- *PAT McNAMARA: The Two Sides Of Pat Mac B
(Tulla Céili Band のアコーディオン奏者だったというクレアのアコ奏者 Pat McNamara のソロ。おそらく 1970 年代か 80 年代の演奏だろう。前半 7 トラック {10 曲} がアイリッシュで後半 6 トラックが “Continental”。こんな早い演奏でダンスできるの?! とつい思ってしまう Pat の早弾きは、もの凄い。アコがギンギン即興しているのに対して、ベースギターがメトロノームのようにきっちりリズムを刻んでいるのが、何とも愉快。おそらくカセット・アルバムの 2018 年再発。Trad Ireland)
- *MARIE AGUS SEAMUS O BEAGLAOICH A
: An Ciarraioch Mallaithe
(名盤復刻。Máire & Séamus Begley の兄妹 {姉弟?} による 1973 年のアルバム。Máire {ヴォーカル、ギター} & Séamus {ヴォーカル、アコ} のゲーリック・シンギングをフィーチャーしたアルバムで、それぞれのソロ・シンギングとデュエットは、Skara Brae 兄妹くらい初々しく円やか。1973 年/2017 作。Gael Linn)
- *MARIE AGUS SEAMUS BEGLEY: Plancstai Bhaile na bPoc A
(Máire & Séamus Begley の兄妹 {姉弟?} による 1989 年のアルバム。Máire & Séamus のデュエットのあるが、大半は Séamus Begley のゲーリック・シンギングとアコーディオンの演奏を中心にした構成で、滋味豊かな Séamus のシンギングとダンスの空気いっぱい)

アコの演奏が楽しめる。ゲスト:Steve Cooney。1989年/2016作。
Gael Linn)

*FRIEL SISTERS:Before The Sun B

(ドニゴールがルーツのスコットランドのグラスゴーの女性アイリッシュ・トラッド・シンガー三姉妹 Friel Sisters の二枚目。アイルランドの伝統歌を見事なシンギングでうたい、またイリアン・パイプス、フルート、フィドルの演奏は、柔軟で揺るぎなくアイルランドの巨匠たちの演奏を想わす風格があって、圧巻。三姉妹のサイン入り。2017作。The Friel Sisters)

*TONY O' CONNELL:Live And Well A

(2015年にフルート奏者のÉamonn O' Riordanと名作"Rooska Hill"を発表した西リムリック出身でコンサーティナーのオール・アイルランド・チャンピオンの Tony O' Connell の初ソロ・アルバム。w. Arty McGlynn {ギター}, Brid Harper {フィドル}, Cyril O' Donoghue {ブラスキー}, Trevor Hutchinson {ダブルベース}。全13トラック/29曲。アイルランドの宝。2017作。Tony O' Connell)

*FLORIANE BLANCKE:Kaleidoscope A

(フランス人アイリッシュ・ハープ奏者でシンガーの Floriane Blancke のソロ。Florian の小気味よいハープに Brendan O' Regan のブズーキ、Joanie Madden のホイッスル、Jimmy Higgins のバウロンなどが重なって楽しい自作曲の"Trip To Achill"から始まる本作は、アイリッシュ最前線の音楽家と共演&交流する中で育まれたハープをフィーチャーしたアイリッシュ・セッションな香りと彩りのある音楽と唄。アイリッシュな香りを放ちつつ、フランス人的な優雅さのようなものが常に香っていて素敵。w. Dermot Byrne, Jimmy Higgins, Garry O' Briain, Tim Edey, Trevor Hutchinson, Kevin Griffin, Seamus McGuire, Claire Egan。2017作。Floriane Blancke)

*MARANNA McCLOSKEY:At Last A

(Cara Dillon 加入前の Oige のシンガーだった Maranna 嬢の貴重ソロ。Maranna は Cara Dillon 風の透明感ある唄声で、トラッド志向の大型女性アイリッシュ・シンガー。w. Eric Rigler {イアーン・パイプス、ホイッスル}, Brian Baynes {ギター、ピアノ、マントリン他}, etc. 2008作。McCloskey Music。検品をしてお送りします)

[CD/USA {トラッド、オールドタイム他}]



(Sally Anne Morgan) (House And Hand)

*SALLY ANNE MORGAN:Thread A

(米国の伝統音楽グループの Black Twig Pickers や女性デュオ "House And Land" で活動するトラッド・シンガーでフィドル奏者の Sally Anne Morgan のソロ。これほどセンスの良いアパラチア民謡風トラッド・アルバムは聴いたことがない。Shirley Collins のヴァージョンというトラッドの名曲 "Polly On The

Shore”{アパラチア民謡仕立てだが、Shirley Collins 風でもある}から幕開けする本作は、Sally のフィドルとアコースティック & エレキギター、バンジョーの弾き語りを中心にしたいってシンプルな音作りで、Sally のクリアーで和むシンギングとアパラチア民謡風の土臭いサウンドと Sally の和むシンギングを包む牧歌的で浮遊感のあるサウンドは、米国産フォーク/トラッド・アルバムとして独創性がある大いに新鮮。ラストが Nick Jones の 1977 年作の不滅の名盤“The Noah’s Ark Trap”収録のトラッドの名曲“Annachie Gordon”なのも憎い。自身のエレキギターとバンジョーを絡めたサウンドも Sally のシンギングもことのほか清らかで美しい。英国フォーク/トラッド・ファンにもお勧め。ジャケットを開けば、可愛い子羊を肩に乗せた Sally 嬢(*^o^*)。2020 作。Thrill Jockey)

- *HOUSE AND HAND: House And Hand A
(Sally Anne Morgan {ヴォーカル、フィドル、バンジョー} と Sarah Louise {ヴォーカル、12 弦ギター、ブズーキ} の女性アパラチアン・トラッド・デュオ “House And Hand” の一枚目。二人のシンギングも二人が奏でる音楽もどっぴりとアパラチア民謡の世界。こだわりの選曲もそうだが、聴けば二人の研究熱心さと米国伝統音楽への没入ぐりがつぶさにわかる。二人の心はかつてアパラチア山脈でうたい継がれていた民謡の世界にタイムスリップしている。英国トラッドで知られる “Faise True Lover” はよりオリジナル目線で、“Unquiet Grave” はアパラチア民謡目線で昇華している。ジャケットを開けば、アパラチア山中。2017 作。Thrill Jockey)
- *ELIZABETH ROGERS & EUGENE FRIESEN: Down In Yon Forest A
(副題 “Songs Of Christmas & Winter”。米国ヴァーモントを拠点に活動する女性 SSW のシンギングはケルトを夢想する北米の女性シンガーらしいクリスタルな輝きのあるシンギング。Paul Winter Consort のメンバーの Eugene Friesen がディーブな味わいのあるチェロの伴奏で、厳かで深みのあるケルティックなクリスマス・アルバムを創作している。ケルティックなセンスは Loreena McKennitt に通じるが、チェロのサウンドがオリジナル性を高めている。Loreena も収録している “Drive The Cold Winter Away” 他全 10 曲。2019 作。787340 Records)
- *SONGS OF CHRISTMAS FROM THE ALAN LOMAX COLLECTIONS A
(Alan Lomax が英国、アイルランド、イタリア、スペイン、米国南部、カリブ海地域で収録したクリスマス音楽と宗教音楽。Bob & Ron Cooper, Ewan MacColl, Seamus Ennis, Sacred Harp Singers, Georgia Sea Island Singers 他による 31 曲。全在庫品ラップ包装なし。1998 作。Rounder)

[CD/LAPLAND]

- *ASSU: Assu A
(Åssu はサーミの伝統的なヨイク・シンガーの Ulla Pirttijärvi のシンギングをフィーチャーした三人組。Ulla がうたうヨイクの濃さは、並外れている。霊的というか節回しには聖と俗が混ざり合って至芸の域。彼女のヨイクにインスパイヤーされて共演者になったという各種ギターの Olav Torget と各種打楽器の Harald Skullerud の演奏は、演奏技術と感性をフルに発揮して独自のヨイクの音楽へと深化させ、類い稀なヨイク音楽へとレ

ベルアップしている。2019 作。Bafe's Factory/Nordic Notes)

[CD/SWEDEN]



(Folk & Rackare)

- *FOLK & RACKARE: Rackarspel B
(いやはや懐かしい。スウェーデンのトラッドに深入りするきっかけになった Ulf Gruvberg & Carin Kjellman の 1976 年のアルバム "Folk Och Rackare" とバンド名を "Folk & Rackare" とし、実質的に二枚目のアルバムとして発売された 1978 年の "Gastmusiker" の二枚のアルバムがめでたく "2 in 1" で CD 再発された。全 22 曲。スウェーデンのトラッドと中世ヨーロッパ風優美さと気品が充満した極北的にすこぶるフレッシュなトラッド～フォーク・ロックは、今聴いても、すこぶるフレッシュ。と同時に当時初めて聴いたときの感動が甦った。Carin 嬢のシンギング…うっとり。アイルランドなら Bothy Band や Planxty に匹敵するバンドですよ。1976 年/1978 年/2020 作。Caprice)

[CD/FINLAND]

- *MARIA KALANIEMI & EERO GRUNDSTROM: Mielo C
(アコ奏者の Maria Kalaniemi とハーモニカ・グループの Sväng のメンバーでハルモニウム奏者の Eero Grundstrom のデュオ・アルバム。フィンニッシュ・トラッドを栄養分にして、自由自在に羽ばたく Maria のオリジナルな音楽。Eero は控えめの演奏で、Maria の音楽を羽ばたかせる役割に徹している。Maria のスキヤットも魅力。フォークフェスのレストランで Phillip Page に彼女を紹介されて 27 年、Maria は実践で学んで、独自のフィンランド音楽を完成させている。2020 作。Akerö)
- *DANCHEV: DOMAIN: Say It C
(フィンランド系ブルガリア人の女性シンガーの Anna Dantchev をヴォーカルに据えた Anna を含めて五人編成バンド "Dantchev: Domain" の本作は、一種独特なブルガリアン・ヴォイスの音楽として結実している。その一種独特さは、バンドの音楽がブルガリアのリズムをベースにジャズやブルースとミックスした音楽で、Anna のブルガリアン・ヴォイスの特長を活かした自在なシンギングと異種交配サウンドの目新しさと醍醐味はドラマティックで鮮烈。2020 作。Glomama Music)

[CD/LITHUANIA]

- *UNDAN: Vidury Mareliu B
(リトアニアの一姫二太郎の三人組トラッド・グループの Udan のデビュー・アルバム。アフリカの民族楽器の親指ピアノ "ムビラ" の演奏家でシンガーの Judita Butkevičiūtė の聖と俗とを持ち合わせたシンギングの何と魅惑的なこと！夢幻感や悠久感が

あって、ユーロ・トラッドとして個性的で音楽の深みが深い。リトアニアの古謡の世界にタイムスリップ。2018 作。Dangus)

*SEN SVAJA:Kraitis Is Pelkės B

(3D [立体視] 様式特殊ジャケット。女性ヴォーカル・トリオの Sen Svaja~Dorota Girskienė [ヴォーカル、パカッション]、Agota Zdanavičiūtė [ヴォーカル、チター、パカッション]、Živilė Rimšaitė [ヴォーカル、チター、パカッション] ~の二枚目。古代リトアニアのフォーク・ソングに焦点を当てたという本作。彼女達の合唱は個々のシンギングに独創性と即興性がある、女性ヴォーカル・トリオによる新感覚の魅惑のフォーク・ソングを佳麗に創作している。2018 作。Dangus)

[CD/F RANCE]

*PICCARD & MASURE:Webbesnaren 2.0 B

(Orion, Laïs, Ambrozij, Comas, Helen Flaherty Band のギター & ヴォーカルで活躍してきた Philip Masure {ギター、シターン、バウロ、ダブツカ、ヴォーカル} とマウンテン・ダルシマー系民族楽器“ホメル”の演奏家の Guido Piccard {ホルム、シターン、ギター、バリト・ウクレ} のデュオ・アルバム。これはこれは…。Philip Masure がケルト系バンドの一員から離れ、ギター系楽器の演奏家の Guido Piccard とのコラボで創り上げたギター系音楽のマジカルなこと！ケルティック・リズムをベースに西欧トラッドに東欧音楽やジプシー・ジャズまで幅広い範囲の音楽を細やかさと彩りを極めた演奏で、美しく奏で上げた耳に新鮮な音楽。ギター音楽ファンならずとも、二人の職人芸的演奏とユーロ・トラッド的美的センス溢れる音楽に心奪われること必至。ゲスト:Soetkin Collier, David Munnelly, Sylvain Barou. 2020 作。Appel)

DAN AR BRAZ:Dan Ar Dans C

(ブルターニュのヴェテラン・ギタリストの Dan Ar Braz が最初のギターを買ったのが 1961 年。本作は彼のギタリスト 60 周年を記念して制作されたアルバム。長い活動を通して共演してきた多くのミュージシャンがこの記念作に参加し、Dan の初期の自作曲を含め、自身の音楽の旅を振り返るのに相応しいブルターニュ音楽のエッセンスを散りばめたナンバーの数々を彼の持ち味である高潔なエレキギターをフィーチャーしたフォークロックを高らかに奏で上げる。その天空に響き渡るような音楽たるや文字通り孤高。Alan Stivell 時代のフォークロックから脱皮して獲得し得たオリジナルなフォークロックだ。2020 作。Coop Breizh)

*YANN-FANCH KEMENER:Roudennou/Traces D

(昨年三月に 61 歳の若さで亡くなった。本作は膵臓癌との戦いと平行して制作された Yann の二枚組の新作で遺作。本作は彼のどのアルバムをも超える素晴らしさ。彼が 45 年の歳月を費やして、農夫や労働者や放浪者や乞食などから聞き取りした民謡等を彼は一曲一曲に魂を込め、聞き取りしたときの思い出をも込めて、シンギングしている。そのシンギングたるや闘病中とは信じられないほど声が軽やかに弾んでいて、早春のような清々しささえぼくには感じられる。彼のソロ・シンギングのみならず、ギターを中心にアコやハーブの伴奏そして男女のシンガーとのデュエットなど、豊かなリズム感と絶妙のコンビネーションそして総合的にブルターニュ調に彩り感を感じさせる音楽の素晴らしさは、言葉で

は言い尽くせない。2019 作。Buda)

*GLENMOR:Dix Ans Deja

A

(ブルターニュ文化や自然環境保護に尽力し、世代を超えて多くの音楽家に影響を与えた国民的シンガーの Glenmor の 2007 年作。彼の落ち着いたあるの深い味わいのある唄の内に怒りや憧憬等の様々の情感が熱く感じられ、強さと優しさを併せ持った素晴らしい唄を朗々と聴かせる。2007 作。Coop Breizh。検品してお送りします)

*GAYANE:He Brings You Flowers

a

(ブルターニュの歌姫 Gayane の 2006 年作。13 曲中 10 曲は英語で {ラストの仏語の歌は英語による 1 曲目の仏語が アージュン}、英国の夢心的な不思議女性 SSW 的。夢のような世界をきらめきのあるアコースティック・サウンド〜フォーク・ロックで、Gayane らしい美意識の中で表現しきっている。2006 作。Keltia Musique。検品してお送りします)

*今回の通販カタログは七ページで収める予定でしたが、収められなかったのが、アイルランドを補充し、二ページ増やして、九ページにしました。四と五ページが折り込みになって、見づらいかも知れませんね。いつもよりページ数が減った分、相当「密」なカタログになったかと思えます。

*今回遊び心で《余談》を入れてみました。仕事上、レコード会社やミュージシャンとの付き合いが年々増していて、世間話を載せるのも良いかなと思った次第です。

*ついでに《余談》を二つ。Dianne Davidsonに自身が発売した“1974”について、アルバム・タイトルは何にする予定だったかを尋ねてみました。ご本人は“1”(アルファベットのアイ)にしようかなと思っていました。なぜかは曲目を見れば分かると思えます。

*アイルランドのハーブ奏者で教師の Janet Harbisonに英国に引っ越した理由を尋ねてみました。ご主人がイギリス人でイギリスに住むお子さんに初孫が出来たからだそうです。アイルランドに仕事を残しているの、時々アイルランドに通う予定だったのが、新型コロナのせいで行けなくなっているそうです。住まいはワーウィック(ワーリック)城の緑地にある古い水車小屋だとか。

*前回、注文締め切り前に主な商品が完売してしまい、締め切り日以降にご注文された皆さんに再入荷大幅遅延や商品未着トラブル等で、大変ご迷惑をお掛けてしまいました。今回はあまりご迷惑を掛けなくて済めばと願っています。

*新型コロナ不況で大変な状況のなかで、当店は運良く昨年並みの売上げに達しそうです。半数以上は 20 年以上の付き合いのお客さま。長年のご贖員に感謝します。今年も一年お世話になりました。今回分の発送が終わりましたら、カタログ販売はしばらく休業します。(船津)